

About the another aim of studying "Kobun (Japanese classic)", and the notation method of "Kobun" text

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/599

古文教育の一側面と古文本の表記の仕方について

福田 孝

一 はじめに

高等学校の教室で古文を教えているとき、生徒がよく口にする言葉がある。

「内容が理解できればいいのなら、現代語訳で読めばよい。わざわざ難しい言い回しをした原典で読む必要はない」

この発言に対しては「原典でなくては理解できないものがあるから、原典で読むのだ」と答えるのでよいと考えている。その理由の一端は、教室で扱われる古文教材の多くが、ほとんど仮名文であることにある。本稿では、古文の本文の特性を扱いつつ、読解とは別の側面の指導のあり方に言及し、古文本の表記の仕方についても言及する。

二 古文の語彙の特性

本論では議論の基本的な対象として、『枕草子』や『源氏物語』といった平安時代の仮名文を念頭において論を進めていく。古文教材となる作品は、鎌倉時代・室町時代そして江戸時代にいたるまでの作品があるが、それらは『枕草子』や『源氏物語』といった作品の後裔であり、教室で古文を扱っていくさいの基盤となるのは『枕草子』や『源氏物語』といった平安時代の作品と考えられるからである。¹⁾

まず、『枕草子』初段を引く。

(例一) 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり。やみもなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝所へ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。冬はつとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

和語は仮名で書き出す、という制約を設けてこの初段を書き直すと、次のようになる。

(例二) はるはあけほの。やうやうしろくなりゆく、やまぎはすこしあかりて、むらさきだちたるく

ものほそくたなびきたる。

なつはよる。つきのころはさらなり。やみもなほ、ほたるのおほくとびちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりていくもをかし。あめなどふるもをかし。

あきはゆふぐれ。ゆふひのさしてやまのはいとちかうなりたるに、からすのねどころへゆくとして、みつよつ、ふたつみつなどとびいそぐさへあはれなり。まいてかりなどのつらねたるが、いとちひさくみゆるは、いとをかし。ひいりはてて、かぜのおと、むしのねなど、はたいふべきにあらず。

ふゆはつとめて。ゆきのふりたるは、いふべきにもあらず、しものいとしろきも、またさらでも、いとさむきに、ひなどいそぎおこして、すみもてわたるも、いとつきづきし。ひるになりて、ぬるくゆるびもていけば、ひをけのひもしろきはいがちになりてわろし。

『枕草子』初段に漢語は一語も用いられていない。こ

れは当時の和文として通例のことである。

『源氏物語』や『枕草子』は、現存する鎌倉期などの古い写本を見るかぎり、和紙に筆で墨によって書きつけられ、多くは草仮名(変体仮名)と呼ばれる仮名を用いて書き写されている。漢字の使用は極端に少ない。教科書に載る場合には、例一のような漢字仮名交じり文の表記であるのが普通である。岩波書店の古典文学大系や小学館の日本古典全集といった、古典の研究者が翻刻して現代日本人向けに読みやすく漢字仮名交じり文にして句読点や鍵括弧といった補助記号を付したものに依拠しているためである。こうした教科書本文のため、生徒は古文の本文は現代日本語と同じ書記様式にしたがって書かれており、異なるのは歴史的仮名遣いによることだけだと思いがちである。

例一のような漢字仮名交じり文の活字本文のほうが、抵抗感なしに古文本文に接することができてよいのかも知れない。が、ここに挙げた『枕草子』初段は和語ばかりであって漢語に由来する語は一語も使われていない、という事実は見過ごされてしまうように思われる。

一般に、平安時代の仮名文の特徴を言うさい、仮名で書かれているという表記の面からが多い。「仮名文」という呼称がその事情を明示する。これは表記体から見た場合であるが、平安期の作品の文章を、現代日本語のそれと比するとき、大きく異なるのは使用している語彙(語種)の違いもある。漢語に類するもの(いわゆる字音語)と和語すなわち大和言葉と、大きく二つに語彙の出自を求めるならば、平安時代の仮名文は多く和語によって書かれている。教科書でよく扱われる、『源氏物語』冒頭「いづれの御時にか」から「この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし」まででは、「女御」「更衣」「下臈」「上達部」「楊貴妃」「大納言」「儀式」「御覧ず」「一」「右大臣」といった、官職や固有名あるいは漢語に由来する日常語の使用に限定され、他は和語での叙述で通されている(「儲けの君」は「儲君」の和語化である)。漢文訓読調の言い回しが多いと言われている『竹取物語』においても、冒頭から「世界の男、貴なるもいやしきも、……音に聞き、愛でて惑ふ」まででは、「三寸」「帳」「猛」「世界」の四語が数えられ

るだけである。平安期では和歌においても、『万葉集』和歌において漢語が「法師」「檀越」「婆羅門」といった語がわずかしか用いられない(巻十六に集中的に)のと同様、漢語は完全に忌避されている。

小西甚一は、『古今和歌集』について「和歌と漢詩とを対等にするため採られた具体的な手段のひとつが平仮名による表記であり、他のひとつが和語だけによる表現であった」と述べ、『土左日記』『竹取物語』『伊勢物語』について「和歌ほどの「雅」を必要としなかったから、官職名や固有名詞などのほか、日常的に使われてあまり漢語らしい感じを伴わなくなった少数の漢語が出てくるし、作中人物のことばには俗語めいた言いかたもまじる。しかし、大部分は和語で書かれており」と述べている。

こうした和語と漢語との使用状況を数値で示すと、表1や表2表3のようになる。表1が古文の文学作品について、表2表3が現代語の語彙の使用状況についてのものである。表1では引用元にあるとおり「どの作品においても、異なり語数と延べ語数を比較すると、漢語の比率は異なり語数の方が高い。逆にいうと、和語の比率は

延べ語数の方が高くなっている。これは、基本語彙に関する和語が多くあり、その使用頻度が高いことを示すものである。また、文章史的には院政期以降に漢文訓読文体や和漢混淆文体の発達により漢語が占める割合が増えるといわれており、『徒然草』『方丈記』『大鏡』において漢語の比率が高くなってきたことがそれを示している。現代日本語においては、雑誌においても新聞においても外来語と混種語では、異なり比率に比して、延べ比率は大きく下がる。対して、和語と漢語とは、異なり比率はほぼ同じ数値にはなるものの、延べ比率は逆転して雑誌では和語が高い数値を示すのに対して新聞では漢語が高い数値を示す。調査年に違いがあり、使われているジャンルが異なる調査結果を示したのは、現代日本語において漢語の使用頻度が四割から五割越えであることが大略確認できるからである。古文における調査は文学作品についてであることを考えると、やはりジャンルの相違があるので、単純な比較は避けなくてはいけないであろうが、その表に見られる数値と比すとき、現代日本語における漢語への依存度は明らかである。

表 1

語種別統計・異なり語数

	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土佐	古今	伊勢	竹取	万葉	計
和語	2896	896	3359	1769	2104	9936	4413	3279	1916	926	1989	1586	1203	6478	19677
漢語	1190	231	1230	146	276	1020	640	235	6	44	4	89	88	20	3264
混種語	154	21	230	35	88	465	193	84	1	14	1	17	21	7	936
計	4240	1148	4819	1950	2468	11421	5246	3598	1923	984	1994	1692	1312	6505	23877

語種別統計・異なり比率

	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土佐	古今	伊勢	竹取	万葉	計
和語	68.3	78.0	69.7	90.7	85.3	87.0	84.1	91.1	99.6	94.1	99.7	93.7	91.7	99.6	82.4
漢語	28.1	20.1	25.5	7.5	11.2	8.9	12.2	6.5	0.3	4.5	0.2	5.3	6.7	0.3	13.7
混種語	3.6	1.8	4.8	1.8	3.6	4.1	3.7	2.3	0.1	1.4	0.1	1.0	1.6	0.1	3.9

語種別統計・延べ語数

	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土佐	古今	伊勢	竹取	万葉	計
和語	14740	2235	24101	6890	7732	194745	30243	21459	11933	3369	10000	6729	4864	50031	389071
漢語	2116	268	4349	295	849	10529	2164	774	21	103	13	183	220	25	21909
混種語	256	24	762	58	156	2518	498	165	1	24	2	19	40	14	4537
計	17112	2527	29212	7243	8737	207792	32905	22398	11955	3496	10015	6931	5124	50070	415517

語種別統計・延べ比率

	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土佐	古今	伊勢	竹取	万葉	計
和語	86.1	88.4	82.5	95.1	88.5	93.7	91.9	95.8	99.8	96.4	99.9	97.1	94.9	99.9	93.6
漢語	12.4	10.6	14.9	4.1	9.7	5.1	6.6	3.5	0.2	2.9	0.1	2.6	4.3	0.0	5.3
混種語	1.5	0.9	2.6	0.8	1.8	1.2	1.5	0.7	0.0	0.7	0.0	0.3	0.8	0.0	1.1

表 2

『現代雑誌九十種類の用語用字』の語種の分布（異なり比率）

和語	36.7
漢語	47.5
外来語	9.8
混種語	6.0

『現代雑誌九十種類の用語用字』の語種の分布（延べ比率）

和語	53.9
漢語	41.3
外来語	2.9
混種語	1.9

表 3

毎日新聞 1994～2002 の合計語種比率（異なり比率）

和語	39.81
漢語	44.46
外来語	8.55
混種語	7.19

毎日新聞 1994～2002 の合計語種比率（延べ比率）

和語	39.37
漢語	54.09
外来語	5.03
混種語	1.51

小説家であり、ロシア文学やフランス文学の翻訳家として名を馳せ、日本語の特性について深く考えて言及もしていた神西清は、日本語の文章の質について「散文の運命」という文章のなかで次のように発言している。「現代口語」は「墮落」「衰弱」している、理由の一端として「漢語」のおびただしい流入がある、と。一方、「その昔わが散文も、粘着力に富み、音楽性に豊かな、美しい時代があった。わたしはその最高潮を平安の初中期に見だし、あの頃の小説作品を、言いようのない懐かしさと、不思議な驚きの念をもつて、回顧するのである。竹取にはじまり源氏に終わる一聯の仮名がき物語がそれである」と。神西清は漢語が流入する以前の、和語で書かれた散文を称揚する。ことはそれほど単純でなからうが、神西のような観点もあるように思われる。(神西がここで言っている「粘着力」とは、「主人公の追放」という漢語の言い方だと、「主人公」が「追放」したのか、「主人公」が「追放」されたのかははっきりしないように、単語と単語との係り受けの関係・格関係が不明瞭になる傾向を指すと思われる。神西は別の「翻訳

遅疑の説」という文章の中で、フランス文学作品の和文翻訳について、漢語を使用せざるを得ない和文訳を示しながら「用言形に書き直すことは……到底望むべくもない」と述べている。このあたりに神西が言いたいことが示されていると思われる。

三 古典本文の活字化

近年、写本などに見られる仮名文の書記について小松英雄の指摘がある。⁽²⁾ 小松は、「音仮名によって日本語を表記すると、語句の切れ目が見分けにくくなってしまふ」欠陥があり(活字の例だが、例二の『枕草子』初段の本文が参考となる)、その欠陥を克服し、効率的な読み取りを可能にするために、草仮名を用いた仮名文においては、「墨継ぎ」や「語の綴り」すなわち「連綿」がなされ、加えて字間を開けて書く「分かち書き」が発達した、と述べている。

この小松の指摘からは、連綿や墨継ぎを用いて表語性・表句性を獲得している写本本文を、活字で翻刻するとき、古典文学研究者はどのように翻刻すればよいの

か・どのように漢字仮名交じり文の活字本文として読者に提供すればいいのかという問題が派生してくるはずである。小松の主張する、仮名文の構文原理のこととも関わり、小松が言うように仮名文の文が現代日本語で用いる句読点では律しきれないという主張と関わるので事は単純でないが、寡聞にして稿者はこうしたことに言及した論を知らない。

たとえば、「蘆刈り」として知られる『大和物語』第一四八段中に、「かくはかなくてのみいますかめるを」という一節がある。漢字仮名交じり文には置き換えにくい箇所なので、このように仮名だけで示される場合が多い。底本としてよく使用される尊経閣本の複製を実際に見てみると、「かく」「はかなくて」「のみ」「いますかめるを」と、語句のまとまりが連続で示され、まとまりとまとまりとのあいだに字間が空けて示されており、写本で読むさいには問題なく語句の区切りを把握できる。

しかし現状の活字本文で読むさいには古文の語彙や言い回しに慣れていない生徒にとってはどこで区切って読むのが妥当かは分かりにくいものであり、古文が敬遠さ

れる一因になっていると言えるだろう。

別言するならば、

My mother went to the school to see my homeroom teacher.

と表記された英文を、どうにか努力して区切って読んで、My mother went to the school to see my homeroom teacher.

と理解しなさいと言っているのと同じことを、現状の古典の活字本文のあり方は生徒や古典読者に対して強いているのである。

注(7)で言及した春日政治は、高野切本文が連続と墨継ぎで意味の補足をしやすくさせていることについて言及しながら、以下のような提示の仕方を試みている(○符が墨継ぎを、傍線が連続(筆続き)を示す)。

はつせに。まう。つることに。やとり。ける。
 ひとの。いへにひさしくや。とらて。ほとん。
 へて。のちに。いたりければ。かのあるし。
 のかく。さたかに。なん。やとり。は。あると。

いひいたしたり ければ そこに たて
 りける むめ の はな を、りて よめる
 つらゆき
 ひとは いさ こゝろも しらす ぶるさとは
 はなそ むかしのかに、 ほひける

必ずしも語句の句切れと、墨継ぎや連綿とが一致して
 いない。春日もこれについては気付いていて、この不
 致について、「多少不自然な断続がないではないが、こ
 の程度の筆続き、墨継ぎが行はれておれば、一種の分別
 書方が存すると言つても妨ないほどである」と述べてい
 る。このような不一致を以て小松の指摘を否定する向き
 もあるが、やはり春日が言うとおりの「一種の分別書方
 が存すると言つても妨ないほど」であると見て大勢は誤つ
 ていないと思われる。そして活字化するのにこうした春
 日のようなやり方もあり得ることを確認しておきたいと
 思う。

また、古文本文を活字にして提供するさいに読解に支
 障が生じることを嫌つたためと思われるのが、島津久基

による『源氏物語』の本文の提示の仕方であった。島津
 の『源氏物語』の本文は漢字が多いことで知られる。た
 とえば、旧岩波文庫の本文では次のようになってゐる。

御局みつぼねは桐壺きりぎりすなり。數多の御方々みかた々を過ぎさせ給ひ
 つ、、隙ひまなき御前渡りに、人の御心を盡くし給ふ
 も、實げに理ことわりと見えたり。參まゐり上り給ふにも、餘りう
 ち頻しきる折々は、打橋うらばし、渡殿わたのぬ、此處彼處の道に、怪し
 き業わざをしつ、、御送り迎への人の衣まぬの裾すそ、堪たへ難
 う、正無まさなき事どもあり。又或時は、えさらぬ馬道の
 戸を鎖し籠め、此方彼方、心を合はせて、はしたな
 め煩はせ給ふ時多かり。

その「はしがき」に「段落のたて方、漢字の宛て方、
 一に味讀の便を主とした。漢字の如き特に留意して、宛
 つべきはなるべく宛てたが、併し無理には宛てぬやうに
 した」とあるが、現代で行なわれている諸注釈の本文よ
 りは漢字がよほど多く宛てられている。しかし、和語で
 あることを配慮して漢字をあまり宛てないようにしてい

る現代の注釈よりは語句の区切りがはつきりして実は読みやすいように思われ、古典の本文を活字として分かりやすく提供したいと考えた島津なりの所為であったと理解できる。

小松や春日の指摘をもとにしつつ、写本本文を、どのように活字として翻刻するのがよいのか・漢字仮名交じり文として提供するのがよいのかはもう少し配慮できるように思われる。現状は、翻刻や漢字仮名交じりの校訂本文を提供する研究者の嗜好に判断が委ねられているだけである。

四 実際の授業での扱い

第二節で述べたような、和語が多用されている様相は、扱う本文を工夫して生徒に示すと、一見して分かりやすく例示できる。和語を平仮名で、漢語を漢字で表記するやり方である。さきほどの例二の文章のようになる。

しかし、例二は読みにくい。古文への拒否反応を一層生徒に引き起こすことになりかねない。現代日本語が漢

字仮名交じり文で漢字を交えることによって語の認識がしやすくなっているのと違い、語の認識がしづらいためである。

第三節での小松や春日の指摘を参考にするならば、平安期の仮名文による作品を、それが和語を主体にして書かれたものであるということを、生徒に拒否反応を持たせないで理解させるためには、分かち書きを用いて或程度の表語性を持たせたうえで、和語は仮名で、漢語は漢字で表記するというのが考えられる。これによって写本の様相に近いものを、活字でできるだけ再現して見せることも可能となる。読みにくさを避けるために、補助記号はやはり用いる方がよいと思われるし、語と助詞とを分かち書きで示すとやはり煩雑に過ぎるので、現代の教科書で用いられている「助詞・助動詞・接頭語・接尾語は、主になる単語につけて書き、それ以外は単語ごとに区切る」という原則(9)によるのがよいと思われる。(それではやはり表語性が不足して、読み取りがしにくいと考えるばあいには、語単位で分かち書きをするやり方もありうるだろう)。

『枕草子』初段について、分かち書きとして、あいだに半角の空白をあけて示してみる。

はるはあけほの。やうやうしろくなりゆく、やまぎはすこしあかりて、むらさきだちたるくものほそくたなびきたる。

なつはよる。つきのころはさらなり。やみもなほ、ほたるのおほくとびちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりてゆくもをかし。あめなどふるもをかし。

あきはゆふぐれ。ゆふひのさしてやまのはいとちかうなりたるに、からすのねごころへゆくとして、みつよつ、ふたつみつなどとびそぐさへあはれなり。まいてかりなどのつらねたるが、いとちひさくみゆるは、いとをかし。ひいりはてて、かぜのおと、むしのねなど、はたいふべきにあらず。

ふゆはつとめて。ゆきのふりたるは、いふべきにもあらず、しものいとしろきも、またさらば

も、いとさむきに、ひなどいそぎおこして、すみもてわたるも、いとつきづきし。ひるになりて、ぬるくゆるびもていけば、ひをけのひもしろきはいがちになりて、わろし。

もう一例、古文入門期の教材としてよく教科書にとられている『宇治拾遺物語』「兎の空寝」の本文について同様な処置をしたものを載せてみる（心の中の思いについては、山括弧を付した）。

これもいまはむかし、ひえのやまにちごありけり。僧^{まう}たち、よひのつれづれに、「いざ、かいてもちひせむ」といひけるを、このちご、こころよせにききけり。〈さりとて、しいださむをまちてねざらむも、わろかりなむ〉とおもひて、かたかたによりて、ねたるよしにて、いでくるをまちけるに、すでにしいだしたるさまにて、ひしめきあひたり。

このちご、〈さだめておどろかさむずらむ〉と

まちみたるに、僧の、「ものまうしさぶらはむ。おどろかせたまへ」といふを、〈うれし〉とはおもへども、〈ただ一度にいらへむも、《まちけるか》ともぞおもふ〉とて、〈いまひとこゑよばれていらへむ〉と念《ねん》じてねたるほどに、「や、なおこしたてまつりそ。おさなきひとはねいりたまひにけり」といふこゑのしければ、〈あなわびし〉とおもひて〈いま一度おこせかし〉とおもひねにきけば、ひしひしと、ただくひにくふおとのしければ、すべなくて、無期むきののちに、「えい」といらへたりければ、僧たちわらふことかぎりなし。

こうした活字本文に高校生時期に一度でも接するならば、古文はもともと仮名で書かれ和語で書かれていることがしつかり理解できるであろう。

別の方法としては、次のようなやり方も考えられる。

①生徒に、教科書の本文から漢語を拾わせて指摘させ、本文全体のなかの漢語と和語との様相を確認さ

せる。あるいは、本文全体を、和語は平仮名で、漢語は漢字で、という風に書き直しをさせて、本文全体の様相を確認させる。

②生徒たちに和語だけで作文を書かせてみたのちに、①により、古文本の様相を確認させる。

①のようなことをさせようとするならば、生徒にきちんと和語と漢語の区別を再確認してやる必要が生じる。それだけでも意義深い国語の授業となる。もし②のような実践を行なうならば、生徒たちは自分たちが用いる現代日本語が漢語なしに成り立ち得ないことに驚き、ほとんど和語だけで文章が書かれている平安期の古文の文章に驚くはずである。自分たちが用いている現代日本語を振り返る良い機会となし得る。

こうしたことは高等学校で古文を扱っている時期のどこかで一度扱いさえすればよい。古文の文章が持つ性質を理解することで古文に接する態度がはっきりするであろうと思う。

古文を扱う授業時間が少なくなり、このような試みをなすこと自体がむずかしくなっている。今まで通りに

古文の本文を扱い、生徒から冒頭のような発言が出たときの対応に用いるのでも良いだろうし、あるいは、漢字があたらない「かくはかなくてのみますかめるを」といった本文が読みづらいのは、写本と違って活字本文では語の識別がしにくいためである、という説明に用いることもできるだろう。

五 まとめとして

古文の文章と現代日本語の文章との相違は、歴史的仮名遣いによるか否か・係り結びの有無・現代日本語は連体形中止となったなどさまざまある。それら同様に、本稿で扱った語彙の相違は理解しやすく、古文の授業でもっと積極的に取り上げてもよいと思われる。これにより古文を原典で読む理由もはっきりするし、古文読解を容易にすることもできる。また、漢語を含むことの多い現代日本語が漢字仮名交じり文で書かれていることと対比して翻って現代日本語の特質の理解に役立たせることもできる。

古文の教育は、古典に表れた思想や感情を読み取った

り、様々な時代の人々のものの見方・感じ方・考え方に
ついて理解を深め、我が国の伝統と文化に対する理解を
深めることの側面に重きが置かれる。同時に、和語を中
心として書かれた時期が我が国の散文史にあったことを
理解させることは、現在の国語の出て来た母体としての
古い国語を理解し、古典の言葉と現代の言葉とのつなが
りと差違とを理解し、言語感覚を豊かにすることにつな
がる。古文教育には、言葉の器のほうの伝統的な言語文
化を理解させる側面もあると思うのである。

注

(1) 「月刊国語教育」715、1987・5「特集 新しい
古典指導の方法」の座談会における鈴木一雄の発言に
「平安時代の文学が一番教材にとられやすいというのは、
……やはり古典の表現、文章として一番安定しているか
らだと思えます。鎌倉の作品も平安時代の文章表現を基
礎としてできているんだし、江戸時代でもそうでしょ
う。」「上代語を知らなくても平安時代の文学をやってい
れば、鎌倉時代の文学も近世の文章も多少読めるという
ことになってくる。……古文全体の基礎なのです。」と
ある(省略……は引用者による)。

(2) 本文は大修館書店『国語総合 三訂版』によった(小学館 新編日本古典文学全集に依拠している)。

(3) 語彙の面からの言及は、管見では、粕谷嘉弘『日本語の系譜—その撰取と表現—』東宛社がある。例えば、『竹取物語』において漢語の表現している分野は、官職・関係・佛教関係・数名詞が主であり、ほかに家具・衣服・音楽・人事といった関係に、そして漢語サ変動詞が用いられているという。

本居宣長『古言指南』(『本居宣長全集14』、筑摩書房 1972)には「スベテ倭文ハ、ナガラカニ、ハカナク書クガナラヒ也。……カリソメニモ漢文メキタル詞ハ用ユマジキ事也」との指摘もある。

(4) 『日本文学史2』講談社 1985、一六六—一六八頁。

(5) 表1は、『日本語要説』第4章「古代語の語彙・語彙史」小林賢司、ひつじ書房 1993から、宮島達夫他『古典対照語い表(フロッピー版)』を用いて十四作品における和語・漢語・混種語(和語と漢語との混合)の統計をした表をお借りした。表2は、代表的な語彙調査であり、1956年刊の雑誌九十種の本文を対象とした国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』1962の表をお借りした。表3は、国立国語研究所報告126『公共媒体の外来語』第3部第4章「新聞記事における語彙の時間的変化分析—語種との関係を中心に—」山口昌也、2007から、毎日新聞九年分(1994)

(6) 2002年の合計の数値をお借りした。

『神西清全集6』文治堂書店 1987、もと単行本『散文の運命』大日本雄弁会講談社 1957。

(7) 小松英雄『II—4 日本語の歴史 書記—言語学大辞典 世界言語編 第二巻—三省堂 1989、『仮名文の構文原理』笠間書院 1997・増補版 2003、『日本語書記史原論』笠間書院 1998・増補版 2000)。

小松英雄は、「書記の本来の目的は情報を蓄蔵することにある」として「必要な情報を効率的に検索できる形で蓄蔵できることは、実用的書記様式にとつて最優先の課題である」と述べている。明晰的効率的に読み手にどう読むかが伝わるように書記できればよいのであつて、第四節での、単純に漢語を漢字で、そうでないものを仮名で表記するという本論の主張は小松の主張と全く異なつたかたちで小松の説を援用していることになる。仮名文の特性を感得してもらつたため便宜的に小松の説を援用していることを断つておく。

なお、小松と同様な指摘は、昭和二十(1945)年三月に執筆されながら時勢のために発刊されず、昭和五十八(1983)年一月に著作集の一冊として初めて公刊された『春日政治著作集2 国語文体発達史序説』勉誠社において春日政治によつてなされている(一七六頁—一九〇頁)。ほぼ同一の指摘と言つていい。

(8) 現代日本語の書記においては、漢字と仮名とを交せて書

く「漢字仮名交じり文」を用いることによって表語性が確保されている（島津の源氏物語の活字本文が読み易いのはそのためである）。どのていど漢字を交せて書くのが読み取りしやすいのかについては、中田祝夫『日本の漢字（日本語の世界4）』中央公論社1982に言及がある。そこには「易しく書けば難しくなる」として仮名専用文がいかにも読みにくいかをめぐる議論もある。

また、「日本語の音声体系の単純さ、発音のやさしさは書き方のむずかしさのうらはらになっている」（城田俊『日本語の音』ひつじ書房1995）との指摘もある。このことは日本語の書記において表語性をいかにして確保するかということと関係する。

(9) 本文は筑摩書房「精選 国語総合」によった（小学館日本古典文学全集に依拠している）。「比叡山」は、「ひえのやま」という地名に「比叡」を当て字したものである。仮名で示した。「一度」も、底本とされることの多い宮内庁書陵部本において表記は「一度」なので「ひとたび」か「一度」か迷う。第三話「鬼に瘤取らるる事」に「一」と表記され「いちど」と読むのが適当と思われる用例があり、それに従った。

こうした本文作成を実際に試みようとするさい、「菊」「梅」といった、漢語が和語化したもの・「艶なり」「優なり」「興あり」「案ず」「怨ず」「制す」「具す」といった、漢語がもとなつて語ができたもの（混種語）をど

のように処理するかも問題となる。和語化していると思われる「菊」「梅」といった語は仮名で、漢語がもとなつて語ができたものは漢字で表記するのがよいだろうか。

また、写本において漢字で「御」としか通常は表記されない、「御」について、和語であることが確実であるとき、どのように仮名表記するかも問題となる。詳細は、小松英雄が編者として名を連ねる『例解古語辞典 第三版』三省堂1992の「おほん（御）」の項に譲るが、そこにあるように「おほみ」「おほん」「おん」「お」あるいは「み」いずれで仮名書きするかは「文脈から敬度を推定して読み分け」て読みをあてるしかない。「御」の読み方については、榊原邦彦「後撰和歌集の「御」」『朝日大学一般教育紀要No.25』1999が参考になる。

（ふくだ・たかし 本学准教授）